

文部省特選 厚生省推薦 1960年文部大臣賞 第2回科学技術映画祭科学技術庁長官賞・財団賞 1961年第6回パドヴァ国際科学映画祭牛頭賞 1961年国際映画協会総会最高名誉賞（モロッコ） 1961年教育映画祭最高賞 NHK賞

鉤虫（こうちゅう）の幼虫がヒトの皮膚から侵入する様を映像でとらえたのは、この映画が世界で初めてであった。この映画はその後30年たった今でも、発展途上にある国々で利用されている。



農村の貧血患者の便を調べると、ほとんどといっていい位、鉤虫の卵が見つかる。鉤虫は小腸に寄生する長さ1～2センチ位の白い糸くずのような虫で、俗に十二指腸虫といわれている。その口を顕微鏡で見ると恐るべき牙を持ち、この口で腸壁から栄養豊かな血を吸い、尻からたえず赤い煙のように吐いている。鉤虫の種類はいくつかあるが、この映画では犬に人の鉤虫（ツビニ鉤虫）を感染させることによって、その生態をとらえることができた。彼らは2対の牙を持ち、腸壁に咬傷を残して時々場所を変え、交尾する。卵は人の便とともに体外に出て、地表の適温下なら2日位で仔虫になる。これが地上で脱皮を重ねて、感染期の仔虫になる。

3、4月から10月頃までの間に、農民が畑を裸足で歩いたり、草とりをする時、露とともに手足に付着し、皮膚から侵入する。そのあとに〈かぶれ〉が残り、農民は〈肥かぶれ〉と呼んでいるが、肥やしでかぶれたわけではない。仔虫は、皮膚から入ると血管に出て血流に乗って2、3日で心臓から肺に出る。肺から今度は気管を上がって喉先まで行き、飲み下されて、食道、胃を下がって小腸上部に栄養豊かな血を吸える安住の地を見出すのである。鉤虫はここで最後の脱皮を遂げて親虫になる。感染仔虫は野菜とともに口から入って感染することもある。この場合、よく喘息や肺炎と間違われる若菜病といわれる症状を起こす。

記録

35ミリ

カラー／27分

日・英・インドネシア・ベトナム・スワヒリ・中国語版

■企画

日本寄生虫予防会

■提供

中外製薬株式会社

■学術指導

国立予防衛生研究所
小宮義孝
安羅岡一男
保坂幸男
石井俊雄

■協力

日本医科大学
赤木勝雄
岐阜県立大学
森下哲夫
大阪大学 森下 薫
千葉大学

柳沢利喜雄
慶應義塾大学

松林久吉
新潟大学 大鶴正満
東京大学 佐々 學
大阪医科大学

岩田繁雄
東北大学 山形徹一
九州大学 宮崎一郎
北海道大学

山下次郎
大阪市立大学

小田 俊
横浜市立大学

松崎義周
鹿児島大学

阿部康男
神奈川県衛生研究所
児玉 威

スタッフ

■企画 国井長次郎

■製作・脚本

村山英治

■演出 杉山正美

■撮影 藤井良孝

■音楽 和田則彦

■演出助手 二口信一

■撮影助手 柄沢正夫

■解説 新藤丈夫